

剣の神は武の神

「延喜式」神名帳に登場する式内社三千百三十二座のうち「神宮」と名のつくのは伊勢と鹿島・香取だけである。古代の大和朝廷が東国のこの二社をいかに重要視していたかが判る。

古代の鹿島・香取の地はのちに霞ヶ浦となる深い入り海の両岸に位置し、大和朝廷が蝦夷征伐をするため前線基地だった。周辺は剣をはじめ武器の原料となる砂鉄が採れた場所でもあり、それらはのちに神宮の神山として守られた。鹿島の地名は船をつなぐ杭をさす「戕(か)河」から、香取は「檝取」から生じたという。どちらも水軍の軍港があったことを彷彿させる。「鍛冶」や「鍛冶執り」などの音が掛けられていることも容易に想像される。

ところで武士(もののみぶ)の語源は、軍事をもって朝廷に仕えた物部氏からきているが、物部氏はこの鹿島・香取の水軍をも支配していたよ

うだ。

鹿島神宮の祭神は武甕槌神、香取神宮は経津主神が祭神である。記紀伝説によれば、いずれも天孫降臨に先立ち葦原中つ国を平定するため高天原から遣わされたという神である。

経津主神は、物部氏の氏神である大和国・石上神宮の祭神・布都御魂神と同一の神とされ、武甕槌神が中つ国を平定したときに帯びていた霊剣のことであるという。経津(フツ)とは、物や人を斬るときに擬音語(フツ・フツ)を表わしている。日本書紀では「一節」という字を当てている。鹿島神宮の神宝は長さ二・七一メートルの直刀で、これを「節霊剣」、別名「平国の剣」ともいっている。フツの音で表される剣の靈威(御魂)で国を平定するという神徳から名づけられたものである。

武甕槌神は、天尾羽張(または伊都尾羽張)の御子ということになっているが、この伊都尾羽張神とは、

左手薬指のパワー

神道流では、現在でも入門の際に血判を捺すという古来の方法をとっている。

左手薬指の爪の生え際から二、三ミリ指の元よりに寄ったあたりを刀の刃で(ヌスキの穂で撫でる程度に)切って血を出し判を捺すのである。「鍼・灸などの東洋医学では、左手の薬指が経絡的に心臓と最も直結し

伊佐奈岐が加具土神を斬り殺したときの刀のことである。

伊佐奈岐と伊佐奈弥の国生み神が大八島国や六つの島々を生み終えた後、産みつけた四十柱の神々の中で三十三番目に誕生したのが加具土神である。火の神であるから産鉄や鍛冶とも深い関係がある。加具土神を産んだため伊佐奈弥は美善登(女陰)を火傷して黄泉の国へ旅立ってしまった。妻を失った悲しみのあまり伊佐奈岐は母殺しにあたる加具土神を伊都尾羽張で斬ってしまったのだ。

すなわち、経津主神も武甕槌神も剣の神であり、鹿島・香取の両神は武の象徴として信仰され、各地の武道場にも奉られて今日に至っている。両神が葦原中つ国を平定したという吉例になぞらえ、戦に旅立つ者はこの神宮に詣でて武運長久を祈ったことから、軍陣に出で立つことを鹿島立といったのはよく知られている。飯篠長威斎家直が香取神宮に祈って日本武道の源流といえる流儀を開いたのは、歴史的・地理的な必然でもあった。

実践して見事成功しています」

(大竹利典師範)

左手を拳に握り薬指の先がつかず掌の部分は重要な経穴とされる。神道流には、剣術と薙刀術の形に「笹隠れ体剣の構え」というものがある。武器は右手に持って構えるが、左手は五指を開き掌を相手の顔面に向けて腕をまっすぐ伸ばして件の経穴から

隈笹の教え

「兵法は平法なり」の観念から試合を禁じた家直は、武芸者による試合の要請に対して「隈(熊)笹の教え」という秘伝を以って応えた。

家直は、試合を申し込む武芸者がやってくると、隈笹が生い茂る上に肖像画のような形でふわりと坐って対面したという。

「何気なく見えて身の構え、扇子の立て方など一分の隙もないうえ、隈笹がつぶれてしまうような坐り方ではなく、ふわっと浮いているような坐り方をしたようです。これをされたら相手は参ったとなるでしょう。今の常識では考えられないことですが、流祖はそれができたのかも知れない。密教には浮揚術のようなものがあったということですから……」

と大竹利典師範は話す。

室町幕府の三管領のひとつ細川家の細川政元は、飯綱の法や愛宕の法といった秘法を修行し、空中に飛び上がったたり、空中に立ったりしたという。明治時代の小説家幸田露伴が「魔法修行者」として政元の一代記を書いているが、家直と同時代に「浮かぶ人」がいたかも知れないのだ。

パワーが放射されるイメージで構えるという独特のものだ。

「よその摩利支天像の中には、これとそっくりの構えをしているものもあります。流祖がそれらによって着想したものが、興味深いところです」

(大竹利典師範)

昔の武士が習得したという摩利支天兵法九字秘密法は、九字の印を結び、摩利支天の真言である「唵摩利支曳娑婆訶」を唱えて行なうもので、聡明成就とか、歡喜成就、病魔退散、論議必勝など何でも「されの修法が用意されていた。

神道流にも九字の印を結び素早く精神統一して無我の境地に入り夜の野山を迷わずに進んだり、悪人、大敵や災難、病魔、勝負に立ち向かう十字の法が伝えられている。

流祖が帰依した摩利支天の信仰は現在の神道流一門によって受け継がれている。毎年の稽古初めは、門人一同が初未(はつむい)の日の午前零時に宗家の敷地内にある摩利支天の御堂に詣で摩利支天の真言を奏上することから始まる。道場内にも摩利支天の画像が奉られている。

「戦時中は、一門の者が斎戒沐浴して摩利支天のお守りをつくり、多くの兵士に授与したものです。私もそのお守りと鹿取神宮のお守りを千人針に縫い込み応召しました」

(大竹師範)

天眞正伝香取神道流は、現在も賑々とその道統を受け継がれている(昨年の日本古武道演武大会での演武)

